

## 健康が一番の幸せ・・・？

「健康が一番の幸せ」ということは、よく耳にする言葉であります。現代は“健康ブーム”で、何はさておいても健康第一で、「健康のためなら死んでもかまわない」と言われるくらいであります。病気をしないで、健康体でいられることは確かに「幸せ」なことであります。しかし、四苦といわれるものの一つである“病苦”もまた人間にとって避けられないものであります。その病気になった時に初めて健康のありがたさが身に沁みるのでありましようが、「一番の幸せ」と言われる“健康”でさえあったら何も不平・不満はなかったでしょうか。

長野の県立こども病院に入院していた、当時、中学三年の少年が入院中に書いた「病気」という題の詩を紹介させていただきます。

### 病 気

この病気は 僕に何を教えてくれたのか 今ならわかる気がする  
病気になったばかりの頃は なぜ どうして それしか考えられなかった  
自分のしてきたことを ふりかえりもしないで  
けど この病気が気づかせてくれた 僕に夢もくれた  
絶対に僕には 病気が必要だった ありがとう

というものであります。病気という人間には避けられない苦にあい、最初は「なぜ どうして」と他人（ひと）と比較したり、健康な頃の自分と比較したりして、苦悩したのでしょうかけれども、次第に周りの状況が見えてくるにつけ、病気と向かい合い、受け入れることが出来たのではないのでしょうか。そして、そこにこそ初めて開かれてくる世界があったのでしょうか。彼は「病気を体験して、生かされて生きる、という言葉が本当にその通りだと思いました」と述べています。健康であったときには決して見えなかった大切なものが、病気を通して見えてきたのでありましよう。だからこそ「絶対に僕には病気が必要だった ありがとう」とまで言えたのではないのでしょうか。

『浄土』というのには、「いまあるがままをあるがままでいる世界である」と教えられます。なかなかそう出来ないのは、他と比較したり、自分の思い通りにしようとする、わが身の内なるところにこそ問題があるのではないのでしょうか。

お念仏の教えによって、苦から逃避するのではなく、苦を引き受けて生きる喜びをいただける身になりたいものであります。